

クイック0と大日岳。どちらもナビゲーションへの道を開く

ナビゲーションの可能性

身体文化学ワークショップの講師を頼まれて奈良女子大に行った。教員をしているかつてのチームメイト鈴木康史に頼まれたからであって、決して女子大だからではない(しかし奈良女はいい大学だ。学食の昼食ビュッフェもうまかった。昔はオリエンテーリングも強かった。高等師範でインカレ優勝していない女子チームは奈良女を残すのみとなった)。

オリエンテーリング競技者を題材としてナビゲーションの認知過程について解説したのだが、プロローグにクイック0の実践を取り入れた。オリエンテーリング部員も含め、方向の変化が大きいレッグがあると、うろろろしたり間違えたポイントになってしまう。オリエンテーリングの経験がない参加者もいたが、オリエンテーリングの経験とクイック0の成績は、中級者以下だとあまり関連がみられないように思う。それは多分整置が身体に染みついていようかどうかの違いなのだろう。

最近クイック0をやるときは、パンチ台の代わりにサッカー練習用のパイロンを使う。もともとは手近なもので済ませようという魂胆から始めた。これが実はテクニカルにもいい練習環境だということに気づいた。パイロンを触るルールにすると、ポイントで一々腰をかがめなければならない。フィジカルにはもちろん、腰をかがめて立ち上がることで、移動の方向性が切れるので、その瞬間に次のポイントへの方向を見失いやすい。それにどう対処すればいいかを考えることは、汎用性のあるナビゲーションスキル習得につながる。デモンストレーションをして見せる。ポイントで整置を切らさないために、地図でなく自分が回るのはいつも通りだが、あるポイントに到着する前に次のポイントへの脱出方向に目をむけていることに気づいた。これは意識してやっていたわけではなかった。自分でもびっくりした。

その後は、クイック0を踏まえつつ

ナビゲーションの認知過程についてレクチャー。空間認知の研究をしている知り合いの研究者の「地図は実はナビゲーションにとって邪魔者なのではないか」というコメントは刺激的だった。未知の空間内でのプランニングフェーズでは、その空間情報を伝える地図は間違いなく不可欠だ。だが、移動のフェーズでは、時として地図情報、もっと正確に言えば地図情報を取り入れるときの自分の身体という文脈が正確な移動方向への展開を邪魔する。地図という媒体を使うかぎり、このことは不可避なのだ。だからこそオリエンティアは、常に整置をし、またトップ選手はポイントでの整置をできるだけ切らさない身体動作を行う。地図の中に入り込むイメージで地図を読み取ろうとすること、記号の柔軟な解釈と利用、環境のスキーマを利用して地図記号を具体的なイメージにすること、トップ選手がやっている地図読みのスキルは、すべからず邪魔者である地図を飼いつくすスキルだと言い換えることができる。

もっと敷衍して語るとすれば、トップ選手が地図を飼いつくすスキルは、マニュアルの持つ弊害を乗り越える術を教えてくれるかもしれない。一昨年6月に暴風雨注意報の中でカッターが転覆し、女子中学生一人がなくなった静岡県の日青年の家では、その後事故防止に様々な観点から取り組んでいる。当然分厚いマニュアルができる。だが、それを果たして読み込み咀嚼して使いこなすことができるのだろうか? 一刻を争う時、そのマニュアルは本当に実効力があるのだろうか。マニュアルは手順を多くの所員にとって未知の領域をナビゲートする上で欠かせない「地図」だが、それはあくまでも大まかな方向性を示すものであって、現実の行為では、その場に応じた対処が求められる。マニュアルによって現実を見失わない術は地図読みスキルに似ているかもしれない。(実際、この事故は当時「注意報下では学校と相談の上で実施」という一種のマニュアル的決定事項に従順になり実際の気候やその変化という現実を目を向け損なった結果と考えることもできる)

こんなスキルと実践の蓄積を持つオリエンテーリングは、針路を見失いがちな現代社会への指針を提示できるだろう。

4月下旬に期せずして、二つの新聞インタビューを同じ日に受けた。一方は地図読み、他方は方向音痴についてがテーマだったが、どちらの新聞記者もクイック0からロゲイニングまで、ナビゲーションスポーツは現代社会の必要なスキルを養う格好のスポーツである点には深く共感してくれた。

ナビゲーションスポーツは「現代を生きる力を育む」というPRがオリエンテーリングの普及に直結するかは分からない。しかし、それを通してナビゲーションスキルに取り組んだものなら、どんなスポーツ形態であれナビゲーションができるということに対する評価とレスポクトには変わらない。ナビゲーションのおもしろさと奥深さにもっと自覚的になることが、社会へのアピールになるとともに、オリエンテーリングの普及にもつながる。



奈良女子大学でのクイック0デモンストレーション



静岡オリエンテーリングクラブでのクイック0による練習会



新大のクイック0による新大オリエンテーリングの基礎練習、空間認知や地図の使い方の体感から初心者へのPRと導入まで、クイック0は普及・教育のツールであると同時に、地図と私たちの関わり方を見直させてくれる最高の教材である。



夕方のラジオ気象通報を聞いて天気図を描く猪熊さん(左から3人目)と、それを興味深そうにのぞき込む飯田さん(右奥)や、スタッフたち。

しびれる

2001年に富山の大日岳で、雪底の崩落による死亡が発生した。冬山での遭難事故など珍しいことではないが、この事故が注目を浴びたのは、昭和30年代の大量遭難をきっかけに登山の遭難防止を主目的として設置された文部科学省登山研修所の研修の事故だったからだ。この事故は裁判にもなり(後に和解)、登山研修所の冬山研修は、その後約10年間中断された。和解後、約2年にわたって雪氷学からナビゲーションに至るまで様々な分野の専門家によって安全検討が行われた。そしてようやく今年、その大日岳を目的地とした冬山研修が再開された。冬山安全検討会でナビゲーションについて助言をし、再開に向けてGPSを担いでルートの検証をした身としては、この冬山研修会再開を見届けることは、その責任を全うすることになる。

地元メディアも注目する。「絶対的な安全が確保された中で実施する」という所長のコメントも掲載される。冬山に絶対的な安全がないことは山男である所長自身ももっともよく知っているはずだが、このようなコメントをせざるを得ないところに日本社会の課題が凝縮されている。もちろん、コメントを発することでそうであると自己錯覚に陥らなければいいのだが。当然今回の安全管理には十分な配慮が払われる。研修には、日本人初の8000m峰全14座登頂に王手をかけた竹内岳洋の登頂成功の陰の立て役者猪熊気象予報士、地元雪氷の専門家である飯田肇氏も同行した。

2月から3月初旬にかけて雪の多かった今年は、3月半ばでも5m近くの積雪があった。飯田さんは嬉々としてそ

の断面の雪質を記録している。ベースキャンプに戻ってからも、そのデータを一人記録用紙とにらめっこしながらチャート化する。夕食時に嬉しそうに、「だいたい分かりましたよ」といってそのチャートを見せてくれた。どの弱層(気温の変化によって雪質が変化し、雪崩の原因になる箇所)が何日に形成されたかが、そのチャートには見事に記されていた。自然環境を断片的にししか表現できない地図からその土地の様子をイメージしきったオリエンティアの感覚に、彼の喜びは似ているかもしれない。

気象予報士猪熊さんは、毎日ラジオの気象通報を聞きながら、天気図を描く。この程度は僕も中学生のころ1ヶ月も気象通報をしていればできるようになった。彼は、さらに電話で自分が経営する予報会社のオフィスに電話を入れ、高層気象や高層気温のデータを取り寄せ、翌日の天気を予報する。下山の前日、標高1000m付近の前進基地は高い気温につつまれ、午後から夜にかけて雨模様となった。翌日下山日は低気圧が近づいている。当然雨は予測できる。猪熊さんの予報は、夜半から雪、積雪15cm程度。それに対して雪氷の専門家飯田さんの見解は、「雪は安定しているから下山路候補の人津谷の雪崩可能性はない。だが、20cmを超えると新雪なだれの可能性もある」

翌日は見事な積雪20cm。朝起きて、予期しなかった雪か、前の日から雪かもしれないというのでは、気持ちの余裕が全然違う。事実、ほとんどの班は前日の予報を受けて、人津谷を避けた尾根を下る計画を立てていた。その日の朝食の話題は、当然「どうして分かったのか」になる。「いやあ、チンタオ

の気温が低かったんですよ」と猪熊さん。

竹内岳洋の登頂を支えた時も、当初は予報を外し続けた。どうしてこの気象条件でそうなるんだろうと試行錯誤をしているうちに何かが見えてきた。それからは予報が当たるようになったという。その何かは「企業秘密」として教えてくれなかったが、何かが見えてくるっていう感覚はスポーツをやってきたものならなんとなく分かる。

雪山の魅力以上に、その山の様子を読み切るお二人の行動にしばれた山行だった。



僕は僕で、オリエンテーリングで得たコンパスや風景の断片からその背後にある環境の構造を読み取るスキルが冬山に通用するかを確認する。そんな行為の積み重ねが誰かをしびれさせることができれば、それにまさる喜びはナビゲーターとしてない。

(村越 真)